

禁煙推進委員会だより 「喫煙の功（？）罪」

山口県医師会理事 沖中 芳彦

筆者は昭和 55 年に大学を卒業し耳鼻咽喉科の医局に入局しましたが、当時は喉頭がんの患者がとても多かったように思います。大阪府立成人病センターのホームページによると、「喉頭がん患者の 96.5% は喫煙者で、非喫煙者は 3.5% である。年齢的には 20 ～ 30 歳代には少なく、60 歳代後半に発病のピークがある。つまり、タバコ 1 箱を 20 歳から 30 ～ 40 年吸い続けた結果としての典型的な生活習慣病といえる」そうです。

実は筆者自身も喫煙していたことがあります。真面目にも（？）20 歳になって喫煙を始めましたが、喉頭がん患者に禁煙を勧めるのに自分自身が喫煙していると説得力がないと思うに至り、26 歳で禁煙しました。しかし患者さんにとって禁煙は容易ではなく、中には喉頭全摘をして永久気管孔を形成しても、気管孔を手で覆って吸気する部分を狭くしながら要領よくタバコを吸うという強者もおられました。またある時、入院患者さんがベッド上で意識消失した状態で発見されました。当初、原因がわからず医療関係者一同大慌てでしたが、誰かがアルコール臭がすることに気付きました。そしてベッドの下からカップ酒の空き瓶が 2 個見つかりました。この方は下咽頭がんの術後で経口摂取ができない状態でしたので、胃管を留置していました。意識回復後の事情聴取で、カップ酒 2 合を自分で胃管から注入したことが判明しました。こうなると、「嗜む」とか「味わう」というレベルではありません。血中のニコチンやアルコール濃度を上げたいがための、まさに中毒・依存症者のなせる業でしょう。

さて、本稿のタイトルですが、喫煙の「罪」は明らかとして、「功」は如何なものでしょうか。ここでは喫煙者の言い分をインターネットの記載から集めてみました。

ニコチンを摂取することはストレスの解消に効果がある。喫煙という行動そのものが退屈しのぎになる。タバコは栽培から販売まで、多くの人に

職を与えているだけでなく、膨大な税収を国にもたらしている。ニコチンは摂食にかかわる脳神経細胞に働き掛け、食欲を抑制する。空腹感がなくなる。吸っている人間同士に連帯感が生まれる。タバコはうまい。香りがいい。リラックスできる。等々。

ニコチンは大脳や自律神経系の神経伝達物質として重要な働きをしている、喫煙者はパーキンソン病発症のリスクが非喫煙者に比べて低い、アルツハイマー病発症のリスクも低い、などの内容が論文名とともに紹介されているものもあります。しかし、タバコはニコチンだけでなく、発がん性物質や発がん促進物質を含むと言われるタールも含有しています。喫煙者自身が発がんの可能性増加という危険を冒してまでアルツハイマー病発症のリスク低下を選択しようとするのはご本人の勝手ですが、喫煙が周囲の人々に及ぼす影響に関しては、「功」はなく「罪」ばかりと思われれます。

本年 11 月 8 日に金沢市で開催された第 45 回全国学校保健・学校医大会のシンポジウム「保健教育を活かした学校保健」において、金沢市の森田医院（内科・小児科）院長、森田正人先生による「効果的な喫煙防止教育の進め方」という講演が行われました。その内容を一部紹介させていただきます。あるお父さんは、子供にタバコの副流煙を吸わせることがないように、ベランダでタバコを吸う、いわゆる「ホタル族」でした。しかし、子供の尿からニコチンの分解産物が検出されました。一体何故でしょうか。実は、喫煙後しばらくは呼気中にニコチンが存在し、それを子供が吸い込むのだそうです。当然、他の有害物質も吸われている可能性があります。テレビの CM で、分煙したことに對して「アイツが人を気遣う大人になった」と言っていますが、この場合「人を気遣う」とは、分煙ではなく禁煙することではないでしょうか。